

V 研究活動と研究環境

1 専任教員の教育・研究業績

(表24)

所属	英語観光学科	職名	教授	氏名	小野 礼子	大学院における研究指導担当資格の有無	(無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）							
1) YouTube等の活用		2015(平成27)年4月～現在		<p>「ことばと社会」（英語観光学科2年次必修科目）では、学生たちが日常的に接する機会のない言語について、YouTubeを使用して生きた言語使用に触れさせている。例えば、パプア・ニューギニアのトク・ピシンやハワイのクレオール、英語を第2言語として使用しているシンガポールのシングリッシュなど、教材用に制作されたDVDだけでなく、インターネットのRadio Australia Tok Pisin Service のホームページやYouTubeに上げられているテレビ番組等を活用している。また、イギリス英語とアメリカ英語の違いや日本の各地の方言についても、YouTubeに上げられているものの中から厳選したものをを用いて視聴させ、実際に使用されている生きたことばに触れさせている。毎回配布するハンドアウトには、YouTubeの視聴等を通して各自が学んだことや感じたこと等を書かせ、提出させている。このようにして、言語や言語変種、それを使用する人々に対する関心を高めるように工夫している。</p>			
2) パワーポイント、インターネットの活用		2012(平成24)年4月～現在		<p>「演習」（Ⅰ～Ⅳ）では、毎授業、1～2名の学生がテキストの内容や個人研究について発表を行う。すべて個人発表で、各学生は学期中に2～3回発表を行うが、その際、パワーポイントのスライドを作成し、それを提示しながら発表させ、プレゼンテーション力を養っている。指導や学生の発表では、必要に応じてインターネットも利用している。学生の発表の後は、その内容をもとにディスカッションを行っている。</p>			
3) 十分な模擬授業時間の確保と参加型授業の実施		2012(平成24)年4月～現在		<p>少人数クラス（3～6名）の利点を活かし、「英語科教育法Ⅲ」（3年次教職必修科目）では、40分のチーム・ティーチング（授業30分＋討論10分）、「英語科教育法Ⅳ」（同上）では、45分の個人による模擬授業（授業35分＋討論10分）の機会を履修生全員にそれぞれ2～3回与えることで、十分な模擬授業時間を確保し、教育実習に備えている。個人による模擬授業の場合、模擬授業担当者以外の学生は「生徒」となる。各模擬授業後は全員で当該授業について討論を行い、「生徒」には参加・観察の記録、模擬授業担当者には自己評価を提出させ、履修生全員を積極的に授業に参加させるとともに、批判的思考（critical thinking）を養うようにしている。また、教育実習を終えた4年次生に教育実習で行った研究授業をしてもらったり、教育実習での体験を話してもらったりしており、その後に質疑応答の時間を設けることで、教育実習に対するモチベーションを高めるようにしている。</p>			

<p>3) 課題解決・実践形式の授業の実施</p>	<p>2013(平成25)年12月～ 現在</p>	<p>少人数クラス(4～6名)の利点を活かし、「教職実践演習」(4年次教職必修科目)の後半では、中学校1年で扱われる英語の文法事項を理解していない大学生に、それらに習熟させるための復習授業を考案し、ティーム・ティーチングの形で実践するというプロジェクトを課している。実践は、2013・2014年度は「Grammar II」(英語キャリア学科・英語観光学科1年次必修科目)、2015年度は「Writing II」(英語観光学科1年次必修科目)のクラスのうち、英語の基礎的な文法事項を理解していない学生のためのベーシック・クラスの1時間(90分)を使用している。実践授業までの約1カ月間で、まず、教育実習での指導上の課題について話し合い、そこから授業の目標を立て、目標に沿った学習指導案の作成、教材・教具の作成、指導の練習等を行っている。「教職実践演習」の履修生たちの中には、春学期の教育実習において、中学校の英語の基礎がほとんどない状態の高校生を教えるのに苦労した体験をもつ学生もおり、課題プロジェクトの復習授業を1年次生のベーシック・クラスで行うことは、「教職実践演習」の履修生たちにとって、教育実習から持ち帰った課題にもう一度向き合える絶好の機会となっている。また、ベーシック・クラスの履修生たちは、上級生から教わるという、普段ほとんど経験できない機会を得て、新鮮な気持ちで授業に臨んでおり、双方にとって有意義な授業となっている。2017年度は復習授業のティーム・ティーチングを「Grammar 203」(英語観光学科1年次必修科目)のベーシック・クラスで行う予定で準備をしていたが、履修生のスケジュールが合わず、最終的に履修生が作成した復習授業用の教材(復習プリント)を「Grammar 203」の担当教員が使用して復習授業を行う方法をとっている。</p>
<p>4) 様々な評価方法の採用とシラバスでの評価基準の明記</p>	<p>2009(平成21)年4月～ 現在</p>	<p>「Reading/Grammar I・I I」「Grammar I・II」「Grammar 103・203」(英語観光学科1年次生必修科目)では4～5回のテスト、宿題(ワークシートの提出等)、期末試験、出席状況のように、様々な評価方法を用いることで、学生の学習にみられる進歩や目標到達度を正確に把握するようにしている。また、評価基準については、『学生要覧』のシラバスに平常点と期末試験の比率が示されるが、平常点の内訳を%で示した、より詳しいシラバスを授業の第1回目に配布することで、学生の学習へのモチベーションを高めるとともに公正な評価ができるようにしている。</p>
<p>2 作成した教科書、教材、参考書</p>		
<p>3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等</p> <p>神戸海星女子学院大学 言語文化研究所 2012年度第3回研究発表 「英語が苦手な学生対象の文法指導 —現在完了形と現在完了進行形の定着を図る取り組み—」</p>	<p>2013(平成25)年3月27日</p>	<p>大学生にとって現在完了形は中学校、現在完了進行形は高等学校での既習の文法事項であるが、これらの文法事項に習熟しないまま大学に入学する学生が少なくないように思われる。本研究発表では、そのような大学生にこれらの文法事項に習熟させる方法を探るために行った取り組みについて報告した。2012年度の神戸海星女子学院大学英語キャリア学科1年次生のうち、習熟度別に編成されている3クラスの中で最も習熟度の低い学生を対象にした「Grammar IIc」の履修生を対象に、5週間(5授業時間)かけて行った取り組みの内容、成果、及び課題について述べた。</p>

II 研究活動					
著書・論文等の 名 称	単著・ 共著の別	発行または発表の 年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号 数）等の名称	編者・著者名 （共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					
「実践的コミュニケーション 能力」養成からみえるもの— 英語による依頼表現を通して—	単著	2012(平成24)年3月	神戸海星女子学院大学 研究紀要（第50号）		23頁～30頁
英語が苦手な学生対象の文法 指導—現在完了形と現在完了 進行形の定着を図る取り組み—	単著	2014(平成26)年3月	神戸海星女子学院大学 言語文 化研究所 言語文化研究（創刊号）		67頁～92頁
"Speech Act Data and the Teaching of English Speaking to Japanese Students"	単著	2017(平成29)年3月	神戸海星女子学院大学 研究紀要（第55号）		21頁～30頁
III 学会等および社会における主な活動					
1992(平成4)年～現在	日本言語学会				
1996(平成8)年～現在	日本「アジア英語」学会				
1998(平成10)年～現在	社会言語科学会				
2004(平成16)年～現在	大学英語教育学会（JACET）				
2009(平成21)年～現在	カトリック大学キリスト教文化研究所協議会				
2015(平成27)年～現在	日本語用論学会				
2015(平成27)年～現在	The International Pragmatics Association				